

共に生きるために

■ アジア学院 2015

事業報告書



学校法人 アジア学院 アジア農村指導者養成専門学校

目次

ご挨拶	3
研修報告	4
地域を変える卒業生たち	11
アジア学院の農場	14
震災復興特別事業完了報告	16
サポーターとつながる	18
会計報告	24
放射能を測定する	26
2015年度コミュニティ	27
2015年度 卒業生	back

学校法人 アジア学院
アジア農村指導者養成専門学校
2015年度 事業報告書
(2015年4月1日～2016年3月31日)

イラスト 小嶋歩
印刷 株式会社 新晃社

© 2016 学校法人アジア学院
www.ari-edu.org

「自分の地域は紛争が続く土地。
争いの中にいる人々に、『平和』といっても、
そんな言葉は届かない。
でも私はあきらめない。
だって私には、かつて『アジア学院の学生だった』
という経験があるのだから。」

カリン・トシヤン（2015年度研究科生）



ご挨拶

学校法人アジア学院 理事長
アジア農村指導者養成専門学校 校長

大津 健一
荒川 朋子

世界では、私たちの目指す方向とは逆に、分断と対立の力が優勢に働いているような気がいたします。それでも、2015年度においても、「共に生きるために」というモットーの元、「個人が自己の潜在能力を最大限に発揮できるような、公正かつ平和で健全な環境を持つ世界を構築する」という使命と目的を共有する26名の卒業生を、19のそれぞれの母国に送り出すことができたことは、何にも代えがたい喜びです。物心共に変わらぬご支援と祈りを続けてくださる多くの支援者の皆様に心からの感謝を申し上げます。

2015年度は、2011年度から続いていた震災復興事業が職員住宅の完成をもって完了した記念すべき年となりました。震災直後の応急補強・修繕工事に始まり、4つの大きな建物の全面建て替えに加え、4棟の職員住宅の建て替えは、アジア学院40年の歴史において最大の事業でありました。それが5年の月日を経て無事に完了したことに対して、それを可能にくださった多くの方々のご支援とご協力への感謝を心から表します。今後はこれらの建物を最大限に活用し、未来の農村指導者育成に貢献していくことが私たちの恩返しであり、勤めであると心を新たにしているところであります。

2015年度はまた創立以来初めての研修効果に関する評価が完了し、英日二か国語の報告書を広く配布できた年でもありました。その詳細はすでに2014年度の事業報告書で述べられていますが、これまで主観的な自己評価のみであったアジア学院の研修の意義付けが、初めて客観的にされたことは、長くご支援くださっている皆様に説明責任を果たせた思いであります。またこの研修評価は、その後別の2名の調査員によって卒業生の活動の影響に焦点を置いた調査 Impact Study へと発展していきました。この後者の調査では約2年をかけて世界10カ国、229名の卒業生を現地を訪ね、卒業生自身や卒業生の村々でのアジア学院の研修の影響 (Impact) についての調査を行いました。その結果分析は2016年度を待たねばなりません。2つの性質の違う評価事業がほぼ同時期に行われたことは、40周年を迎えたアジア学院が次に進むべき道を探る上で大きな意味があります。すでに調査結果を受けて変更したこと、開始したことなど多々ありますが、今後も調査結果を丁寧に分析し、学院のカリキュラム、経営、運営方針を考えていきたいと思っております。



研修報告

農村指導者研修プログラム

2015年4月1日～12日12日

副校長・教務主任 大柳 由紀子



ティリフィナ・バネノウァキ・トマス、
タンザニア学生

私は何年もの間、地域の農民たちをどう支えればいいのか悩んでいました。

時々研修を行って堆肥の作り方を教えることはあっても、結局農民たちは量的に十分な堆肥を作ることができず、年々収量はおちていくばかりでした。農民たちは食べるものにも事欠いています。私にできるのは、化学肥料を買いなさい、と提案するくらい。でも彼らにその化学肥料を買う金はないんです。もちろん私たちがその金を補助することもできません。畑の土は劣化していき、ますます収量は落ち、私は途方にくれていました。

でもアジア学院で私はその答えを、解決のための手段を知ったんです。私はこの知識と技術をもって、農民たちを助けることができます。こんな幸せなことってありますか？

2 015年12月、アジア学院は無事に19か国28名の研修を終えることができました。お支え下さった皆様に心から感謝申し上げます。9か月間の研修で、学生たちは1965時間に及ぶ学びを完遂させました。通常の専門学校ならば2年間かけて学ぶ時間を、わずか9か月で駆け抜けていった学生たち。そこには39科目218時間に及ぶ座学と、それに倍する573時間の農業実習、12都府県にまたがる見学研修、なによりも多様性の中で暮らしていく生活そのものから来る学びがありました。9か月間、学生たちは何を学

び、何をコミュニティに持ち帰っていったのでしょうか。彼らは何を夢見ているのでしょうか。そして、彼らを学びにを駆り立て続けたものは何だったのでしょうか。

アジア学院の学生たちは、アジア・アフリカ・大洋州その他のいわゆる途上国の農村で働く人々です。最低でも3年以上の農村経験が求められており、2015年度学生の平均年齢は37.5才、中には20年以上も農村で働く経験を持つ者もおります。学生のほとんどは農村に生まれ育ち、農村で働く決意をした人々ですが、それぞれの持つ背景は様々です。長年同じNGOで働く人、農民組合の青年リーダー、早くに親を亡くしNGOの奨学金制度の受益者として育った後にそのNGOで働くようになった人もいます。先述したティリフィナはタンザニアからきた学生です。彼女はどちらかというと静かな性格でしたが、どんな学びにも一生懸命で、授業の後に残って質問を続けたり、とてもうれしそうな顔をしながらノートをとる姿が印象的な学生でした。いつも高いモチベーションを保ち続けた彼女に、職員が「あなたはいつも一生懸命学び続けてくれた。何があなたを支えたの？」という質問をしたところ、冒頭の言葉が返ってきました。彼女は涙ぐんでさえました。農民たちと向き合い続けた毎日の中で、彼女はどれだけ苦しんできたことだろう。見つからない答えに長年悩み続けたのち、アジア学院に来る機会を得た彼女は、日々の学びから多くの「答え」を得たのです。



オイコスチャペルでの朝の集会、
“Morning Gathering”



自分の中で育てていく価値

学院のカリキュラムには3つの柱があります。「サーバントリーダーシップ(人に仕える指導者)」、「フードライフ」、そして「コミュニティ作り」です。この3つに「学びの姿勢」、「社会的弱者に奉仕すること」、「自然と調和をもって生きること」、「人々と調和をもって生きること」、「労働の尊厳」、「霊的成長」、「農村の価値」を加えた10のコンセプトを「キーコンセプト」と呼び、学院で学びを深めていくための重要な考え方や位置付けています。これらのコンセプトは人から教えられるものではなく、日々の学びから自分のなかに育てていくものであると私たちはとらえています。これらの考え方を深めていくことを通して、私たちは「共に生きる」ことを目指しつつ、「神を愛し、人を愛し、土を愛する」生き方を実践しようとしています。

学生たちは農村指導者として、様々なことを学んでいきます。指導者論としては「サーバント・リーダースhip」「参加型農村調査法」「プレゼンテーション技術」「ファシリテーション技術」「宗教と農村生活」などを学びました。開発に関する分野では「環境と開発」「栄養概論」「ジェンダー論」「友の会の活動について」などを学ぶとともに、足尾銅山見学や西日本研修旅行を通して日本の開発の負の部分に触れ、自分の国においてどんな開発を目指すべきかを学びました。持続可能な農業・技術においては、「持続可能な農業概論」「野菜・作物概論」「畜産概論」「化学農業の危険性」「熱帯における自然農業」「パーマカルチャー」「アグロフォレストリー」「バイオガスワークショップ」「立体農業の哲学」などを座学で学ぶと同時に、東北における農村地域研修旅行や関東の有機農家の見学研修を通して農村のあるべき姿と農業技術を学びました。もちろん有機農業・畜産技術は日々の実践の他、実習授業としてぼかし肥

作り、堆肥作り、土着菌の採取と活用、地域資材の活用、炭焼きと木酢作り、籾殻くん炭、自家採種、養豚(人工授精、出産、去勢)、養鶏(育雛、人工ふ化)、養魚、発酵飼料作り、さらには肉加工(ソーセージ、ハム)についても学びました。

最高の技術ではなく最適な技術を

アジア学院の学びは学校としても特殊だと思います。上記の座学や実習はもちろんのことですが、「共同体からの学び」と「多様性からの学び」も重視されています。学院では学生を Student や Trainee とは呼びません。彼らは Participant (参加者) と呼ばれます。職員は Teacher (先生) とは呼ばれません。学生たちは講義を受け持つ職員や外部講師ばかりではなく、畑から、家畜からも学んでいきます。そして何よりも学生達は互いから学びあっています。学院が様々な地域から異なる背景をもつ学生たちを招く理由の一つがここにあります。フィリピン人学生の直面する小作人の問題の答えを持っているのは、日本人職員ではなくブラジル人学生かもしれません。象の獣害に悩むリベリア人学生に解決法を示したのは、スリランカ人学生とインド人学生でした。同じ悩みを抱えるミャンマー人学生とガーナ人学生が答えを共に探っていくこともあります。農業技術者を専門家として日本から途上国に送るのではなく、実際に農村で働く途上国の人々を学生として招き、日本で研修をしていく意味は、こんなところにもあるのです。

時に「アジア学院の学生は熱帯から来るのだから、温帯である日本で農業を学んでも役に立たないのではないか」という質問を受けることがあります。農業技術で言えば、学院で伝えているのは「レシピ」ではなく「原則」です。たとえばボカシ肥の作り方であれば、「鶏糞を何パーセン



ト、土を何パーセント、米ぬかを何パーセント」とだけを教えるのではありません。「鶏糞は栄養源、土はその栄養素を固定させるもの、米ぬかは微生物のエサとなる炭水化物。ではあなたの地域では米ぬかの代わりに何をつかうか」となるのです。すると「コーンの粉がある」「キャッサバの搾りかすを使おう」「未熟なマンゴーがたくさん無駄になっているが、どう使えばいい?」「もみ殻くん炭の代わりにカカオの殻を炭にできるか?」といった議論が始まるのです。学生たちが途上国農村に戻った時に使えない技術ならば教えても意味はない。最高の技術ではなく、学生たちの地域にとって最適な技術を。これが学院の目指す農業技術なのです。

農村指導者養成専門学校として、アジア学院が学びの中心に据えるのがサーバントリーダーシップ（人に仕える指導者）です。サーバントリーダーは上から指示を与えるのではなく、人々と共に働き、人々の声に耳を傾け、議論をファシリテートします。人々の成長を促し、情報を共有し、ビジョンを示すことでコミュニティを導いていくのです。そのようなリーダーシップこそが草の根の農村指導者として必要な姿であると学院は考えています。では学生たちはどのようにこのリーダーシップを学び、身に付けていくのでしょうか?

コミュニティで学ぶ意味

アジア学院では、自らを「コミュニティ(アジア学院共同体)」と呼びます。ただ寮で生活して学校に通って学習するのではなく、互いをコミュニティメンバーと呼び、平等な関係性を築き、共に働き、食事を分かち合い、共に生きることを目指します。時に20か国を超える国や文化の違いを学びの糧とし、宗教の違いさえも学びの源と考えています。異なる国

チャン・フップ、 ミャンマー学生



村のための私の夢とは、乾燥した土地が緑になり、森はよく保存され、牧草地は広がりそこで家畜が草を食み、乾いた溪流や川は再び水源となり、誰もが専業者として農業を営み、土地は蘇りどの家庭にも一年を通して十分な食料を得るに足る良き収穫をもたらすことです。また人々は良き生活の機会があることによって、出稼ぎ労働者が減るのです。親たちは、子供の教育に十分な収入があるので、不登校の子どもも減ります。

その結果、誰にも義務教育への道が開かれ、将来的に識字率が向上し、村に教育を受けた者が残る希望が生まれるのです。ですから家庭はより幸せに、またより平和になるのです。村は新鮮で健康的な、農薬を使わないものを食し、そして最終的に平和で、楽しむことが多く、そして神様から恵まれた環境が全ての家族にあるのです。





から来たルームメイトをもち、なかなか通じない英語をコミュニケーションツールとし、互いの考えを正面からぶつけ合いながら9か月を過ごしていきます。学生たちがばかりでなく、職員もボランティアも互いに真正面から向き合っていきます。農作業も調理も掃除も皿洗いも一緒に行い、互いの想いに耳を傾け、時に議論し時に支えあい、分かち合いのときを持ちます。そのコミュニティライフこそが、アジア学院のリーダーシップの学びの源となるのです。また研修プログラムそのものも、学生自身がリーダーシップを取るようにデザインされています。たとえば日々のフードライフワークも、リードするのは職員ではなく学生です。学生たちは4つのグループに分かれ、田畑の管理・家畜飼育・食事準備をローテーションで担当します。それぞれのグループにはグループリーダーがあり、こちらは2週間ごとに交代で学生がつとめます。週に一度の農場管理活動(Field Management Activity)では、必要な情報を職員から学ぶとともに、畑や家畜を観察して一週間の計画を共に立てていきます。「いくら座学でコミュニケーションの仕方を学び、傾聴の大切さを語り、リーダーシップについてわかったようになっていても、グループの中で実践ができなければ、トマトの一つも作れない」と私たちは考えています。本当のリーダーシップの学びは農場やキッチンにある、というのがアジア学院の指導者研修なのです。

9か月の研修の間、彼らは授業と一緒に学び、97種類の野菜・作物と一緒に育て、豚のエサと一緒に混ぜながら、自分のコミュニティなら

ばどんな資材を使えるのかを語り合ってきました。卵の産卵率を計算することがどうしてもできずに、リストの前で一緒に四苦八苦もしました。山羊小屋を新しいものにしたいと、担当学生たちが話し合って職員の許可をとりつけ、ついにはとてつもないものを作り上げました。それは農場長が「人が住めるんじゃないか」と笑いながら誇らしげに話すほどの出来栄でした。時にはぶつかり、また話し合い、時には泣いている同級生によりそい、一緒にすべてを乗り越えてきました。その日々の一つ一つが、彼らの中で結実し、自国でなすべき将来像となっていきました。

研修の最後に、学生たちはそれぞれの夢を発表します。同時に学生たちは皆、その夢の実現が容易ではないことを知っています。自分たちのコミュニティで待っている困難を理解しています。「僕らの前に立ちほだかる問題は、まるで大木のような。その大木に僕は、夢という斧で立ち向かうんだ。10年、20年かかるかもしれない。途中で僕自身は倒れるかもしれない。でもきっと、30年後の僕のコミュニティは、今は全く違う、すばらしい農村になっているんだと信じている。」9か月前は人前でうまく話すこともできなかった青年が、最終発表でまっすぐに前を向いて語っていました。

学生たちの学びを支えてくださったすべての支援者の方々、研修を受け入れてくださった農家・団体の皆様、特別講師として講義していただいた方々、そして常に学生たちを祈りに覚えてくださったすべての皆様に感謝申し上げます。学生たちは研修を終え、本当の意味での草の根のリーダーとして、地域に戻っていきました。ある学生はこういいます。「私



見学・交流等、研修で お世話になった方々

順不同・敬称略

特別講師

田坂興亜、村上真平、鎌田陽司、酒匂徹、山田祐彰、桑原衛、芳賀欣一、小倉恭子、甲斐田満智子、坂原辰男、田村修也、戸松礼菜、佐藤喜作、ステーブ・リーパー、J・B・フーパー、アルデンドウ・チャタジー、ジョセフ・小澤、バン・ウンギ、全国友の会、友の会各支部、那須塩原警察署

農業関連見学・研修先

帰農志塾、金子美登・石川宗郎、田下隆一、桑原衛、民間稲作研究所、森林の牧場

夏期個人研修

自由学園農場、関根養魚場、成澤増雄、丸山尚史、エルム福祉会、なじみ庵、ゆいの里、マ・メゾン光星、那須友の会

見学先・交流団体

【栃木県】 那須野ヶ原博物館、足尾銅山鉱毒事件学習（旧松木村跡、足尾製錬所）、渡瀬川遊水池、西那須野幼稚園、矢板幼稚園、槻沢小学校、八立小学校、黒羽中学校、宇都宮北高校、宇都宮女子高校、国際医療福祉大学、西那須野教会、那須塩原教会、家の教会しおん、大田原カトリック教会、大田原キリスト教会、那須高原教会、矢板教会、塩谷一粒教会、四條町教会、宇都宮上町教会、鹿沼教会、松原教会、氏家教会、足利教会、足利東教会、小山教会、上三川教会、鹿沼キリスト教会、上河内教会、栃木教会
【東京都】 日本キリスト教団婦人会連合、東京ユニオンチャーチ、日本バプテスト同盟婦人会、保谷教会、番町教会、早稲田教会、中目黒教会、都南教会、ルーテル東京教会【他府県】 まぶね教会、川谷教会、桐生東部教会、渡良瀬川鉱毒根絶太田既成同盟、丸木美術館、ARISA（アジア学院サポーター）各位、各地ロータリークラブ

農村地域研修

【山形県置賜地区】 渡部務・美佐子、菅野芳秀、長井市レインボープラン推進協議会、基督教独立学園、黒沢巖、高畠共生塾（遠藤周次）、高畠町住民生活課エコタウン推進室、米沢郷牧場、JA山形おきたま農業組合、川西ときめきセミナー（佐藤恵子、原田加矢乃）、川西町役場（原田俊二町長・産業振興課）、しらたかノラの会、米沢興譲教会、草岡ハム加工組合、秋津ミチ子
【山形県戸沢村】 戸沢村産業振興課地域づくり推進係、国際交流協会、芳賀欣一、神田地区、新庄最上有機農業者協会【山形県庄内地区】 加藤鉦一、相馬一広、志藤正一、共立社鶴岡生協、JA庄内たがわ宮農政課、荘内教会（矢沢俊彦）、荘内教会保育園、藤島町農村環境改善センター、庄内協同ファーム、庄内産直センター、鶴岡市藤島庁舎エコタウン室、佐藤昌司、JA鶴岡西郷支所、有限会社ドリームズファーム、小野寺喜作、緑のイスキア
【秋田県仁賀保町】 土田雄一、佐藤喜作、JAにかほ、にかほ市役所、曹洞宗太白院、都市農村交流センター【岩手県】 酒匂徹

西日本研修旅行

【東京都】 農村伝道神学校、立正佼成会【静岡県】 聖隷学園、聖隷クリストファー中・高等学校、遠州栄光教会、十字の園、アドナイ館、第二アドナイ館、山中忍【大阪府】 大阪南YMCA、NPO釜ヶ崎支援機構、野宿者ネットワーク（生田武志）、関西いのちの電話、関西沖縄文庫、希望が丘教会
【熊本県】 熊本いのちと土を考える会（高丸和彦）、エコネットみなまた・はんのうれん（大澤菜穂子）、水保病資料館、ほっとハウス【広島県】 広島平和記念資料館、栗本勝子（被爆証言）【三重県】 愛農学園高等学校
【岐阜県】 永谷嘉規、中村満・真紀子、加藤優志、三浦大地、高谷裕一郎、伊藤和徳、辻健太郎、町上貴也・広子

は自分の民族の人々だけでなく、すべての悩む者、貧困や災害に苦しむ者、危険で不安定な生活を強いられる人々のために、人に仕える指導者とならなければならないことに気がついたのです。」そして彼らがこれからどのような状況になっても、学院での学びが彼らを支え続けることを私たちは信じています。卒業生の一人が話してくれた言葉が、それを代弁してくれます。「自分の地域は紛争が続く土地。争いの中にいる人々に、『平和』といっても、そんな言葉は届かない。でも私はあきらめない。だって私には、かつて『アジア学院の学生だった』という経験があるのだから。」

どうか神さまが、学生たち一人一人の今後を守り続けてくださいますように。そしていつの日か彼らの夢が実現することを信じています。



カリキュラム

研修時間総計: 1,965時間

講義一覧

指導者論

アジア学院の指導者論
サーバント・リーダーシップ
アジア学院の歴史と建学の精神
参加型農村調査法
自律学習
時間管理法
プレゼンテーション技術
ファシリテーション技術
プロジェクト立案法
ストレス管理法
宗教と農村生活
報告書作成指導
平和、持続性、政府と人々

大津 健一
荒川 朋子、大柳 由紀子
荒川 朋子
荒川 朋子、大柳 由紀子
大柳 由紀子
ティモティ・アパウ
大柳 由紀子
大柳 由紀子
大柳 由紀子
ジョセフ・小澤*
ジョナサン・マツカリー、ティモティ・アパウ
デービッド・マッキントッシュ
スティーブ・リーパー*

開発論

環境と開発
栄養概論
共助組合論
ローカライゼーション
ジェンダー論
アジアの人身売買の問題
足尾銅山鉱毒事件と田中正造
いかに共同体に有機農業を広めるか
那須疎水と西那須野開拓の歴史
友の会の活動について

田坂 興亜* (アジア学院理事)
ザチボル・ラコー
遠藤 抱一
鎌田 陽司* (NPO 法人「懐かしい未来」代表)
荒川 朋子
甲斐田 満智子* (国際こども権利センター)
坂原 辰男* (田中正造大学)
佐藤 喜作* (有機農家)
田村 修也*
全国友の会、友の会各支部

持続可能な農業・技術

持続可能な農業概論
有機農業
野菜・作物概論
畜産概論
作物病虫害管理
代替技術
化学農業の危険性
熱帯における自然農業
パーマカルチャー
アグロフォレストリー
生産者と消費者の提携
パイオガスワークショッブ
立体農業の哲学
農業技術実習
畜産技術実習

アルデンドウ・チャタジー* (76年卒業・インド)
荒川 治
荒川 治、小笠原 真由
ギルバート・ホガング、大谷 崇、
ティモティ・アパウ
荒川 治、小笠原 真由
潘 炯旭
田坂 興亜* (アジア学院理事)
村上 真平* (自然農法家)
酒匂 徹* (有機農家)
山田 祐彰* (東京農工大学講師)
戸松 礼菜* (帰農志塾)
桑原 衛* (NPOふうど代表)
芳賀 欣一* (戸沢村国際交流協会会長)
荒川 治、小笠原 真由
ギルバート・ホガング、大谷 崇、
ティモティ・アパウ
大谷 崇、小出 秀夫*

日本語、日本文化

小倉 恭子*

有機農業実習

有機農業、畜産、食品加工の論理的
および実践的知識の習得

野菜作物

ぼかし肥作り、堆肥作り、土着菌の採取と活用、
天恵緑汁、魚の氨基酸資材、水溶性カルシウム、
炭焼きと木酢作り、籾殻くん炭、自家採種、
練り床を利用した苗作り

畜産

養豚 (人工授精、出産、去勢)、養鶏 (育雛、
人工ふ化)、養魚、家畜衛生、飼料配合、
発酵飼料作り、発酵床式畜舎

肉加工

ソーセージ、ハム

農場管理活動

グループによる農場管理
(野菜作物栽培、および畜産管理)
フードライフワーク
(自給自足のための農作業および給食準備)
グループリーダーシステム

その他の研修

コミュニティ・ワーク (田植え、稲刈りなど)、
内的成長を促す活動 (朝の集会、Growth Note、
コンサルテーション、リフレクションペーパー、
振り返りの日)、口頭発表、収穫感謝の日、
国際交流プログラム、見学研修、
農村地域研修旅行、西日本研修旅行、
ホームステイプログラムなど

* は特別講師

地域を変える卒業生たち

学生募集・卒業生ネットワーク担当 キャシー・フローディ



Graduate Story

ムジンバの農家の生活を変える、 自然環境に寄り添う農業

トウモロコシを収穫した CBCC のメンバー
たちとキャサリン・ムタンボさん(最右)

2012年卒業のキャサリン・ンタンボさんは、マラウイのリビングストニア・シド・エイズ・プログラムのプロジェクトオフィサーとして働いています。帰国後、彼女の派遣団体は持続可能な農業の考え方に大変感銘を受けました。彼女はコミュニティで「自然環境に寄り添う農業」の研修を始めました。研修に参加した20軒の農家のうち、馴染みのない手法であったためか、1軒だけが成功しました。この農家は10m×15mの庭で始め、今では1エーカーの100%腐葉土の土地を所有しています。

2014年に、キャサリンさんはホホ・コミュニティにおいて子供の体力向上と若者の発展を目指した新しいプロジェクトの役員を務めました。ホホでは、5歳以下の子供の栄養を改善するため、20箇所のコミュニティ単位の子供ケアセンター(CBCC)にこの活動を紹介しました。彼女はCBCCの周囲の20軒の農家に「自然環境に寄り添う農法」を教えました。栄養不良は地方の都市でよく起こるという経験を経て、アジア学院で学んだリーダーシップの基本、有機農業の知識や技術、そして栄養状態を改善するための環境に調和した農業技術を地方の



自然環境に寄り添う農業で地方の農家を 力づけることは食の安全を保障するうえ においてベスト。

キャサリン・ンタンボ、マラウィ

農家に知ってもらおうと決心しました。すべてのCBCCは、毎朝子供達が大豆とトウモロコシのオートミールが与えられるように、大豆とトウモロコシの畑を持っています。このCBCCの子供を対象にしたプロジェクトは事業として完了しましたが、CBCCと農家は、以前のように化学肥料に頼らなくなり、持続性のある彼らの農法を継続しています。

農家たちの中には、この「自然環境に寄り添う農業」の重要性を証言する人がいます。イダ・ムソフィさんは研修を受けた後に実践を試みた際、周囲の人々からこのような農法はただ時間の無駄であると嘲笑されることもありましたが、その後の彼女の成功を目の当たりにした人々は、永続的な食料自給と農業を使わない有機農業の第一歩を踏み出したことに気が付きました。イダさんは「環境変化に直面する現在は、「自然環境に寄り添う農業」は正しい実践である」と言います。「現在の気候変動に対してもこの農法こそが最善の手段であると感じた。今年は広い土地でトウモロコシを植えつける計画をしています」。別の農家のスタバーン・バンダは、この農法を導入して以来、不安定な降雨にも関わらずトウモロコシの出来が良いと近所から評判だと言います。エレン・ズガンボさんは、この「自然環境に寄り添う農業」が、以前のような恵の雨に見舞われなくなってしまったという天候の問題、そして飢餓の問題を解決できる唯一の方法であると説明します。

キャサリンさんは、地方の農家が国家の食料安全保障のカギを握ると説明します。「一般に地方の農家は化学肥料を買う余裕が無いため

自らの家族の食料さえ十分に収穫できません。一方、都心の人たちは地方の農家が担う食糧生産に大いに依存している。「自然環境に寄り添う農業」で地方の農家を力づけることは食の安全を保障するうえにおいてベストなものであると感じています。この農業技術は化学肥料が不要なので費用がかからない。また土壌改良により農産物の収量が増えるため余剰を販売することができ、現金収入を得ることも可能です。」

キャサリンさん自身が中心となって「自然環境に寄り添う農業」を積極的に広めていることを支援者達は評価し、可能性を見い出しています。「気候変動に直面する中、この農業技術を農家たちが習得することに対し支援者達が共感し資金供与を行う結果、農家は自給に必要な食料を確保することができるのです。」「アジア学院での学びによって、発棄物と見なされるものを資源として再発見し、将来を見据える目を開くことができた。」

更に彼女は HIV/AIDS と農業との間に密接な関係を見る心を研ぎ澄ましてくれたと続けます。HIV/AIDS と闘いながら生きている、あるいは差別を受けている人々は栄養豊富な食料を必要としています。キャサリンさんは、アジア学院で学ぶ以前から関わっていた HIV/AIDS プログラムと「自然環境に寄り添う農業」とを結び付けることでコミュニティが包括的に改善するよう、意欲的に活動しています。



トウモロコシを運ぶ農民たち(左)
研修を受けたイダ・ムソフィさん(右)

卒業生が直面する困難と 学生選考の課題

木 難の中に希望がある。2015年は喜びと悲しみに溢れた年でした。卒業生のコミュニティでの最大の困難は、ネパールを襲った大地震でした。ネパール国内の多くの地域で卒業生の家族、家、村、土地が影響を受けましたが、卒業生たちは神のご加護により無事でした。今回の災害に関して極だったことは、ネパール国内外にある卒業生の組織が救援物資を送ることができたことです。2つの卒業生団体(インド・カルカッタ、フィリピン)が、救援隊の派遣に向けて状況を調査し、急遽必要な救助法を決め、国内で支援グループを組織化し、体制を作り上げました。救援物資には衛生キット1,000組、テント100張、水洗タイプと地元の材料を使った水を使わないタイプのトイレ100機が含まれていました。

2015年は、西アフリカのギニア、リベリア、シエラ・レオネの3カ国でエボラ出血熱の問題が収束した年でもありました。卒業生たちが無事であったことに心から感謝すると共に、家族を亡くされた人々に祈りを捧げます。卒業生を含むこれら3カ国の人々は、家族の離散や飢餓、国内での紛争を経験しました。最も大変な時期にアジア学院にいた卒業生は「帰国する前はどんな状況を目の当たりにするのだろうか、非常に心配でした。帰国後、私がコミュニティを見てまわると、女性グループが離散していたり、友人を亡くした人を見ました。しかし、彼らの農園が再出発できるよう直ちに行動を起こしたところの中にアジア学院の学びがあったことに希望を見出しました。」と言いました。

このような状況にある国においても、私たちは根気よく学生募集を続けることが最も良い方法だと信じ、リベリア、シエラレオネから2名を受け入れました。結果として困難な時期を乗り越えて人々をリードすることを身につけた卒業生をこの地域に輩出することができました。不幸なことに、訪問者に対する入国審査が厳しく、この地域からの2016年の応募者を募ることはできませんでしたが、現在はゆっくりではありますが以前の状況に戻つつあります。日本政府がエボラ出血熱発生国からの入国者管理が不要であると認めたこと、そしてアジア学院において応募者を再度受け入れる決定をしたことに勇気付けられています。

気候変動という言葉は近年「警告」という意味で捉えられがちですが、世界的に見れば疑う予知のない、現実起きてきている問題です。

最も影響を受けるのは経済的に貧しい人々や生計を農業に依存している人々です。マラウイとザンビアの農家では植栽の時期を予測することができなくなりました。農家は従来通りに植えたとしても成長するための雨が降らないことがあります。降雨のタイミングにあわせても、穀物を成熟させない乾季が続くかもしれません。あるいは、必要以上の降雨が成長を止め、腐敗させてしまうこともあります。ザンビアの卒業生は「トウモロコシを植えるにあたりアジア学院の農法で8kg、化学薬品を使って17kg播種しました。成功するかどうか皆半信半疑でしたが、乾季を乗り越えることができたのは前者のアジア学院の手法を採用した方でした。翌年もこの農法で、作付を増やすつもりです。」

卒業生から多くの報告が寄せられ、アジア学院の指導者養成プログラムが彼らの地域で発生する様々な困難に対応できるよういかに効果的に組まれているか、また問題の改善の機会にいかに学びが活かされているかを知り、勇気付けられています。

photo: Debaki Khadka



ネパールでの震災被害



救援物資の配給に携わるフィリピンのWAND団体

photo: WAND



アジア学院の農場

副校長・教育部長・農場長 荒川 治

大豆によりフードライフをより豊かに

グリーンオイルプロジェクトでは、2011年の東日本大震災以来、放射能対策として油脂作物の生産に注目してきた。大豆や菜種、ひまわりなどの種から油を絞ると放射性物質は油に移行しないことが分かっていたためである。その後、汚染された土からの野菜作物への放射性物質の移行は、当初予想された10%より大幅に低く、ほとんどが1%以下であることが確認された。学院ではこれを受けて、油脂作物の中でも特に従来から生産していた大豆の増産に力を入れることとした。この結果年間300kgから500kgの大豆の生産量を、2011年からの5年間で2295kgまでに増産することができた。

大豆は稲、小麦と輪作することにより、病害虫や雑草を防ぐ効果がある。また、窒素固定をするので、大豆の後作として稲を栽培すると大きく増収する。学院の大豆の後の田んぼでは、分けつが出るのが他に比べて非常に早く、一本植えの苗から25から32本の分けつが出て、反当り8俵以上収穫することができた。

大豆の油粕は肥料としても、そのまま利用できる。有機の田んぼでは、雑草を抑えるために、田植え後30日間深水にする。この深水管理期間中に、有機物がゆっくりと分解されると酸素が消費され、有機酸が発生して根腐れの原因となり、分けつもなかなか増えてくれない。しかし、たんぱく質の塊である大豆油粕は、とても早く分解されるため、この根腐れが起こらず、初期成長が非常に良くて分けつがみるみる増えてゆく。結果として、早期に必要な有効分けつを確保できるのである。有機稲作に強力な有効肥料を確保できたことになったと言ってよい。

食堂に対しては、油の自給にも貢献した。食堂で消費する油は一年間で約230kg程であるが、この内160kgを自給できた。また、大豆から豆乳を搾り、乏しい山羊乳の生産を多少なりとも補うことができた。これには、研究科生の働きがとて大きかった。率先して大豆を食堂で有効利用してくれたのである。農場のボランティアは、豆乳から山芋などを混ぜてアイスクリームを作り、暑い夏の農作業の後に皆で楽しんだ。この他、醤油、みそも大豆から加工され、食堂を潤している。さらに、ベジタリアンの少なくない学院では、大豆は重要なタンパク源でもある。

大豆油粕は飼料としても優秀である。これまで、家畜の飼料は、遺伝子組み換え大豆が混入しているであろう輸入脱脂大豆に依存せざるを得なかった。これを、2011年から脱脂大豆自給を目指し学院内で大豆油を絞り始め、2015年には全家畜(鶏、豚、山羊、魚)の年間使用量1600kgを確保し、飼料自給に貢献した。これにより、購入飼料は国産白ぬか、国産小麦、米ぬか、フィッシュミール、カキガラ、ビタミン、アルファルファ(少量)、子豚用粉末のみとなった。さらに、小麦も4200kg生産し、そのうち3200kgを飼料として畜産に供給することができたため、白ぬかや小麦の購入も減らすことができた。

大豆を稲、小麦との輪作として面積を大きく組み入れることで、地域資源を利用した自給型の環境保全型農業がまた一步完成に近づいたと言える。

しかし、課題もある。大豆の栽培面積を大幅に広げたことで、収穫などの手間が大きく増大した。収穫も調整も農場職員・ボランティアに依存している状況であり、今後作業者の負担軽減を考えていく必要がある。



種の自給

今年は、50種類の野菜の採種を行った。F1から採ったもの、F1から採り続けて固定させたもの、代々学院に伝わっていて品種名の分からなくなったものなど様々である。稲、小麦、大豆、黒大豆、さつまいも、えごま、サトイモ、トマト、ナス、冬瓜、コリアンダー、ピーマン、唐辛子、キュウリ、オクラ、ホワイトコーンなど多岐に亘る。特にホワイトコーンは多くのアフリカ諸国で主食である。このホワイトコーンの種を自給するための乾燥貯蔵庫を、ボランティアと共に完成させた。さらに多様性に富む食文化を学院食堂で実現することができるようになる。

種の自給は食糧主権における最も重要な課題のひとつであり、これからも時間をかけて、しっかりと使える種を自給してゆきたい。

ホエー豚の定着と学生主導の山羊小屋建設

近隣のチーズ会社からホエーを譲り受け、優秀な発酵液体飼料として肥育豚に継続的に与えている。ホエーは生きた乳酸菌、乳糖、ミネラル、ビタミンを豊富に含み、嗜好性もよく豚の食欲と健康を増進する。生育も良くなり豚独特の臭みを消し、食味向上に貢献している。

山羊飼育の経験豊かな学生の主導で、山羊にとって快適なバンブーハウスを3つ作ることができた。高床式になっており、床の竹と竹のすきまから糞尿が下に落ちるようになっている。給餌箱もあり、餌は床から離れている。また、通気性も良く、床が常に清潔に保たれ、病気を防ぐことができる。さらに、搾乳し易い構造になっている。



2011年3月～2016年3月

震災復興特別事業完了報告

副理事長・復興事業財務担当 遠藤抱一

2011年3月の東日本大震災から5年、アジア学院復旧復興計画を、国内外のキリスト教会を中心とした多くの個人、組織、団体の物心両面に拠るご支援により2016年3月に完了させることが出来ました。ここに改めて、ご支援をお寄せ下さった多くの方々に、心より御礼を申し上げます。

この5年間にお寄せ頂いたご献金は計1,431件(国内95%、海外5%)、8億2,700万円(国内15%、海外85%)に上りました。これは、学院のほぼ6年分の経常費に相当する額でした。

特別寄付金の残高については、理事会にて審議の結果、なお残された若干の復興事業(事務棟2階の断熱工事、マナハウス加工棟の修繕等)に充てる他、寄付者のご意向を尊重し、復興事業で建築、構築した施設設備の充実並びに維持管理に限りて充てることとし、復興事業修繕引当金として貸借対照表に計上致しました。

発災直後、復興のための総事業費が優に数億円必要になると見積もられ、又それ以上に110キロ北東の福島第一原発事故による人の健康への影響や、農場の汚染などで学院の将来が見通せない不安などと相まって、当時は復興事業が最終第4期にまで行き着けるとは、全く予想すら出来ませんでした。しかし夢にも思わなかった程多くの方々、組織、団体が、私達とその先輩達が継続して来た途上国の農村開発指導者養成の働きを、それ程大切に思っておられた結果、夢が実現したのでした。

このことを成し遂げて下さった私達のパートナーでもある支援者の方々には、万感の思いを込めて御礼を申し上げ、今後この与えられた新しい器を用いて、より一層途上国の人材養成事業に精進すること以外に感謝を表す方法はないと、今心を新たにしつつ復興事業完了のご報告を致します。

2015年度に完成した職員住宅(左)と農業関連施設(p17)



復興事業内容

復興事業は、研修継続に必須な施設順に以下の通り立案計画し、順次施工致しました。

第1期 2011年度完了

旧本館、旧コイノニアの応急補強・修理、女子寮修繕、既存の農業研修棟西側を事務棟に増改築

第2期 2012年度完了

コイノニア食堂棟、教室棟新築

第3期 2013年度完了

男子寮新築、豚舎新築、バイオガス発酵槽設置
2014年度完了

女子寮屋根の葺き替え、キャンパス内のインフラ整備、オイコスチャペルの新築

第4期 2015年度完了

既存のマナハウス食品加工棟1階を鶏の屠殺室に改修、職員住宅4棟（7世帯分）新築、農業関連施設棟新築

頂いたご献金の使途

① 合計 827,035,225 円

② 資産計上(建設仮勘定を含む) (上記建築物、構築施設設備、擁壁・排水処理施設等)
691,588,786 円

③ 災害復旧費 (応急修理費、東京町田市の農村伝道神学校への疎開研修関連経費、農場の放射能汚染による食料購入費、資産計上に馴染まない仮設男子寮やその他の仮設費、構築物の解体費や改修費、建設監理費等)
98,761,176 円

④ 特別寄付金残高(復興事業修繕引当金) (①-②-③)
36,685,263 円

復興特別寄付金寄付者名簿

(100万円以上)

国内団体

東日本大震災ルーテル教会支援 (Japan Lutheran Emergency Relief)
カリタスジャパン (Caritas Japan)
日本基督教団 (United Church of Christ in Japan)
東京ユニオン教会 (Tokyo Union Church)
東京南ロータリークラブ (The Rotary Club of Tokyo-South)
国際基督教大学教会 (International Christian University Church)
クリスチャン・パートナーズ (Christian Partners)
東京霞が関ライオンズクラブ (Tokyo Kasumigaseki Lions Club)
在日大韓キリスト教会 (Korean Christian Church in Japan)
カノッサ修道女会 (Canossian Daughters of Charity)
カトリック麹町教会 (St. Ignatius Church)

国内個人

須藤 繁、丹羽 章、山下 逸喜(敬称略)

海外団体

合同メソジスト救援委員会 (United Methodist Committee on Relief)
カトリック救援奉仕団 (米国、Catholic Relief Services)
聖公会救援開発 (米国、The Episcopal Relief & Development)
長老教会災害支援 (米国、Presbyterian Disaster Assistance)
米国福音ルーテル教会 (米国、Evangelical Lutheran Church of America)
ルーテル教会災害支援 (ドイツ、Diakonie Katastrophenhilfe)
北米アジア学院後援会 (北米、American Friends of ARI)
カナダ合同教会 (カナダ、United Church of Canada)
米国合同教会 (米国、The United Church of Christ)
連帯するプロテスタント伝道 (ドイツ、Evangelical Mission in Solidarity)
韓国メソジスト教会 (韓国、Korean Methodist Church)
台湾長老教会 (台湾、The Presbyterian Church in Taiwan)



サポーターとつながる

事務局長 佐久間 郁

持 続可能性、自給自足の精神はアジア学院の大切な柱です。当学院の学生の選考基準に学費が払えるかどうかという基準はなく、農村地域に心を注ぎ、その地域に戻ってこれからも人々に奉仕したいと願う学生たちをこれまで迎えてきました。学校として学費という収入がないのは珍しく、国や自治体からの補助は受けず、私たちは43年間奨学金を探し、また支援者を募ってここまで事業を展開してきました。当学院の農村指導者育成事業は支援者の皆さまとの協働作業であるともいえます。

アジア学院の活動は皆さまの想いの結晶

私たちの財政的な状況は決して油断できるものではありません。震災復興事業における皆さまからの尊い指定寄付、特別寄付によって建物が新しくなり、所々床が軋むプレハブ校舎、食堂が新しくなり、一見豊かな組織のように見えますが、一般会計は依然変わらず自転車操業です。

2008年に補助活動課ができ、2013年にはアジア学院後援会がアジア学院の組織の中に組み込まれ、募金・国内事業課として、支援者の皆さまと共に考え、気づき、行動を起こせるような関係づくりを目指して再出発をしました。

募金・国内事業課になり始まった「アジア学院サポーターの集い」、
「アジア学院ランチイン東京」は、支援者の皆さまとFace to Face(実際にお会い)して、肌の温度を感じ、参加型で皆さまと共にこれからの活動を築いていきたいという想いから生まれました。今年も多くの方にお越し頂き、皆さまとお会いできたこと、その出会いを通して生まれる新たな関係や発想の数々。それは私たちにとって大きな励みとなっています。

「貧者の一灯」「私たちが届かない地域に届けてください」。寄付を送ってくださる際に振込用紙に書いてくださるメッセージに私たちは励まされ、また気を引き締めて尊いご寄付を農村指導者の養成に用いていかなくてはと思われています。小さな一滴がたくさん集まって

大海を作っているように、アジア学院の活動が多くの皆さまの想いの結晶であることに、心から感謝しています。

当学院がアジア・アフリカの農村地域が抱えているそれぞれの課題や日本の社会の直面している現状を共有し、支援する側される側という関係ではなく、共に成長できるような支援の形態を目指していきたいと願っています。

農産物のセールス

2015年度の総売上額は2014年度に比べ1.3%(138,168円)増加しました。主な理由として、鶏舎改築と餌の改善等の対応が効果的であったためか、卵の売上が2,000,000円を超え(2,004,412円、前年比126%)たことが挙げられます。補助活動収入総額26,000,000円の10超%を占める豚肉と共に、天候に左右されない安定した売上を保つ重要な商品であり、また利用者からの評価が高いことから今後の売上増加を見込んでいます。

一方、人気商品のニンジンジュースは9月の長雨の影響等で不作となり1340本(前年比3380本減)しか入荷できませんでした。しかしながら、新たな試みとしてルバーブそのものを農産物直売所(乃木の郷)、東京都内の健康志向のジュース製造会社、レストランなどへ販売するなど新しい試みも行いました。

国内支援者・支援団体

(10万円以上の寄付・順不問)

教会関係

カチン平和教会 KCPC
河内キリスト集会
神戸ユニオンチャーチ
国際基督教大学教会
東京ユニオンチャーチ
(カ) 援助修道会
(カ) 大田原教会
(キ) 鎌倉栄光教会
(教) 阿佐ヶ谷教会
(教) 西那須野教会
(教) 早稲田教会
(公) 聖アンデレ教会
(公) 聖オルバン教会
(公) 東京聖三一教会

奨学金

RASA
東京霞ヶ関ライオンズクラブ
日本キリスト教協議会
Hope and Faith International
(カ) 聖心会 (あけの星修道院)
(一財) アジア農村交流協会
(一財) 日本福音ルーテル社団
(教) 番町教会
(公) 東京聖テモテ教会
聖テモテ奉仕奨学金委員会
(公財) ウェスレー財団
(財) 大阪コミュニティ財団
(財) 地球市民財団
(財) 新倉会
(社) 東京アメリカンクラブ
日本学生支援機構 (JASSO)
(財) ロータリー米山記念奨学会

諸団体

IKE 設計開発事務所
アジア婦人友好会
一般社団法人IBS社団
宇都宮 90 ロータリークラブ
全国友の会中央部
チリウヒーター (株)
東京南ロータリークラブ
栃木愛信会
ワールドファミリー基金
(医社) サマリヤ会
(一社) わかちあいプロジェクト
(株) 鳶ネットワーク
(公財) あしぎん国際交流財団
(公財) ウェスレー財団
(公財) 全国友の会振興財団
(公財) 三菱 UFJ 国際財団
(公社) スコーレ家庭教育振興協会
(宗) 立正佼成会那須教会
(特活) WE21 ジャパンたま
(特活) 国際協力 NGO センター
(有) 知立商事
東京ブリティッシュエンバシクワイヤ

学校

栃木県立宇都宮北高等学校
(学) 青山学院中高等部
(学) 国際基督教大学高等学校
(学) さつき幼稚園
(学) 女子学院
(学) 明治学院中学校・
東村山高等学校
(学) 立教女学院中学校

海外支援者・支援団体

(10万円以上の寄付・順不問)

教会関係

米国合同教会・キリスト教会共同世界宣教
Global Ministries of the United Church of
Christ and the Christian Church (Disciples
of the Church) - Common Global Ministry
Board
カナダ合同教会 The United Church of Canada

諸団体

アジア学院北米後援会 American Friends of ARI

奨学金

合同メソジスト教会世界宣教 The United
Methodist Church - General Board of Global
Ministries
アメリカ福音ルーテル教会 Evangelical Lutheran
Church of America
世界教会会議 World Council of Churches
エムシアンキリスト教協会 M'Sian Christian
Association



「アジア学院の食材を使って、健康にも良いものを販売したい!」
支援者の声。初めて炒り玄米を販売しました



「あなたのお買いものが、未来の農村リーダーをサポート!」
私たち HTC 支援者バザーのモットーです



2015 つながる活動のいろいろ

イベント

収穫感謝の日 ARISA バザー報告

2015年度は1週間前の準備から多くの方が参加してくださり、皆さまが積極的にお手伝いして下さったのが印象的でした。昨年に引き続き、一品寄付バザー会場には、「あなたの買物が未来の農村リーダーをサポート!」というスローガンを掲げ、今年は過去最高の売り上げとなり、ARISAの奨学生であるニコラス・タフヤン氏の写真と共に、お買物とアジア学院のつながりをアピールすることができました。

収入

一品寄付バザー総売上	702,401 円
ARISA フード総売上	360,500 円
総売上計	1,062,901 円
(支出計 95,117 円 純利益 967,784 円)	

2010~2015 純利益

2015	967,784 円
2014	802,516 円
2013	842,825 円
2012	588,885 円
2011	351,975 円
2010	662,363 円

古本・古着市 4月18～26日

2015 年度は 4 月に 9 日間開催した(前年度は 3 月、10 月に 3 日間)。イベント来場者は 223 人、初めての来場者が 66 人とリピーターが増えているのも特徴だ。



チャリティコンサート 3月9日

日本基督教団東日本大震災救援対策支援本部のご支援を得て、新日本フィルハーモニー管弦楽団に関する演奏者3名によるクラシックコンサートをコイノニアホールで開催した。1月7日に開催決定となったため、広報含めた準備期間が短かったが来場者80名の方にお越し頂き、素敵なおひと時となった。





様々な教会や学校で、卒業生たちが熱い想いを語りました



「私は今まで武器をもって戦ってきた。でもアジア学院に来て、命を支える食べもので闘うことを学んだ」ニコラス・タフヤン(フィリピン)

交流プログラム

西日本キャラバン 11月5日～24日(20日間) 『私が人々に仕える理由』

7年目のキャラバン、2人の研究科生(タフヤン・ニコラス/フィリピン、カリン・トシヤン/東北インド・マニプール州)の活動と共に当学院の活動、つながる方法などを各地で話しをする機会を与えられました。

キャラバンホスト

【愛知県】(教)中京教会、Nagoya Saint Church、名古屋ユニオン教会、キリスト聖書学校、AHI アジア保健センター、壁谷早苗、中村満・真紀子、町上貴也・広子【岐阜県】バプテスト岐阜教会、JIFH 国際飢餓対策機構、(同盟)岐阜キリスト教会、永谷嘉規【滋賀県】近江兄弟社学園高等学校、アシュラム【大阪府】大阪女学院大学、豊中教会、豊中教会、清教学園中・高等学校、千里国際学園高等学校、TIFA 国際交流の会とよなか、大阪インターナショナル教会、田中義信、堀江信一【京都府】同志社大学、同志社国際学院初等部、京都上賀茂教会、気まぐれ平和カフェ、丸谷一耕、李善恵【奈良県】古民家ろっさやお、長田展季・操【兵庫県】啓明学院中高等学校、(教)イエス団教会、神戸ユニオン教会、(ル)宝塚教会、頌栄短期大学、関西学院大学、関西学院高等学校、Peace & Nature、Canadian Academy、(教)神戸栄光教会、(教)神戸雲内教会、本岡節子、山本クラウディア、マイケル・シャルトン【高知県】清和女子学院、高知大学【広島県】広島友の会、(教)広島流川教会、高石孝子【福井県】(教)丸岡教会、福井地区社会委員会【富山県】遠藤優子

訪問活動

6つの大学を訪問し、講義やアジア学院の紹介をおこなった。また、学生団体とキャンプの企画から一緒に行くことで、以前より多くの学生が参加してくれた。

立教大、明治学院大、明治大、国際基督教大、青山学院大、東京農大

外部交流プログラム

5月～

那須塩原市立波立小学校 グローバルタイム給食プログラム (前期3回)

6月～

那須塩原市立波立小学校 グローバルタイム授業 (前期3回)

8月

東京農業大学小塩ゼミ(40人)

11月

那須塩原私立槻沢小学校3年生 アジア学院見学

短期研修

青年海外協力隊(JOCV)技術補完研修

5月に協力隊事務局を訪問し、研修の評価や今後の人数の確保、新たな研修の可能性を話し合うことができた。

参加人

数8人



外国ボランティアによって盛り上がるイングリッシュファーム



那須セミナーハウスは徐々に理想の姿へ変身



ビジタープログラム

スタディキャンプ

2015 年度は昨年度を上回る宿泊者を得ることができた。「平和と Foodlife」をテーマにし、平和の意味、アジア学院の活動の目的、フードライフの大切さを体験によって感じてもらうプログラムを行った。満足度も高く 5 点満点中平均が 4.6 以上であった。

参加団体

46 団体 /602 人 (前年 43 団体 /554 人)

参加団体

- 【4 月】 非電化工房
- 【5 月】 イングリッシュファーム (13)、非電化工房 (11)、宇都宮大学 (14)
- 【6 月】 明治学院大学齋藤ゼミ (15)、非電化工房 (11)、香港崇徳大 (4)
- 【7 月】 非電化工房 (10)、千里国際高 (19)、目白町教会 (11)、ひばりが丘教会 (18)、ICU 高校 (14)、代田教会 (13)、共愛学園 (19)、新島学園 (13)
- 【8 月】 勝山学園 (4)、聖隷クリストファー高 (4)、BSA troop12 SF(17)、UCC(9)、非電化工房 (8)、駒沢大明石ゼミ (27)、立教大&一橋大&清泉女子大 YMCA(20)、明治大寺田ゼミ (14)、桜美林大&青山女子短大&新島短大&SCF(29)
- 【9 月】 ユースキャンプ (5)、同志社大居住研 (13)、同志社大神学部 (3)、文京学院大 (15)、TUC(11)、非電化工房 (8)、関西学院高 (18)
- 【10 月】 SCF(8)、関東学院高 (3)、非電化工房 (13)
- 【11 月】 非電化工房 (13)、ICU (19)
- 【12 月】 東京農工大 (3)、非電化工房 (12)、聖心女子大 (9)
- 【2 月】 日大時田ゼミ (10)、非電化工房 (5)
- 【3 月】 ユースキャンプ (9)、SCF (4)、関東教区中高生キャンプ (38)

ワーキングビジター

震災後低迷していたワーキングビジターであるが、今年は昨年度を更に上回る参加者があった。滞在の満足度の平均は 5 点満点中 4.8 と極めて高かった。

参加人数

135 人 (前年 130 人)

イングリッシュファーム 5 月 4 ~ 6 日

英語を使って農作業や料理をしよう!というプログラム。ネイティブスピーカーの職員やボランティアが中心になり企画をすることができた。参加者の満足度は 5 点満点中平均 4.8。体験に満足して頂くことができた。

参加者内訳

大人 4 名、学生 6 名、子ども 3 名

セミナーハウス美化プロジェクト

インテリア、フラワーデザイナーのラリ・ヨシオさんに依頼し、セミナーハウスを魅力のある施設にする美化プロジェクトを行うことができた。玄関、ロビー、裏庭が大変きれいになり宿泊者からも好評を得ている。また、セミナーハウスだけでなくアジア学院のショップと玄関先の美化も同時に行うことができた。

古本市に合わせ地下室のペンキ塗りや本棚の作成も行った。また、ロビーからホールにつながる通路にアジア学院の展示ブースを設けアジア学院の活動をより知ってもらうようにした。

海外支援者とのつながり

AFARI専務理事 J・B フーバー

アジア学院の使命の実践には、世界中の献身的な個人や団体からなるコミュニティを必要としています。アジア学院北米後援会 (AFARI) も、このコミュニティの一員です。1983年の設立から、アメリカにおけるアジア学院の片腕として、北アメリカのアジア学院支援を広め、深めています。

2015年度は、AFARI とアジア学院の関係を更に深める貴重な機会に恵まれた年でした。その一つは、6月の荒川朋子校長のアメリカ訪問です。6月12日から14日までAFARIの理事会に出席しました。高見敏弘名誉学院長以来、アジア学院の校長が理事会に出席したのは初めてのことでした。また荒川校長と国際関係担当職員デイビッド・マキントッシュは、合同メソジスト教会と米国聖公会との会合をニューヨークにて持ち、その後、両氏はカナダ合同教会との会合のため、トロントにも向かいました。いずれの教会もアジア学院の大切なパートナーです。また、私が、荒川校長と支援者や支援団体との会合をシアトルにて設けました。

私自身も2回、9月と3月(2016年)と2度アジア学院を訪問しました。例年通り授業を持ち、コミュニティメンバーと話し、会議に出席しました。9月の訪問で特記すべき点は、合同メソジスト教会から選出されたアメリカ先住民のリーダー2人を同伴して行ったことです。私はこの訪問を実現させるために、何年も準備してきました。この先住民のリーダーの2人はアジア学院の指導スタッフと有意義な話し合いの時を持ち、コミュニティ全体に向けてプレゼンテーションを2回行いました。学生の多くが母国で先住民出身であったため、学生と2人の間には自然と連帯感が生まれていました。アジア学院職員もアメリカ先住民について新しい視点を、農村指導者研修プログラムにアメリカ先住民の受け入れも検討していくことになりました。

3月の訪問では、私と共にAFARIの理事が2人、アジア学院を初めて訪れました。アジア学院や名誉学院長の高見牧師の家族と長い付き

合いのあるスティーヴ・ター(2008年からの理事)、そしてデイヴ・コーツワース(2012年からの理事)が妻のレベカ氏と共に来訪しました。3人は職員や研究生にインタビューをし、また生活を共にしながら、アジア学院における日常生活の様々な面について、より深い洞察を得ました。更にアジア学院とAFARI理事の合同会議が初めて行われました。今回の訪問により、AFARIが設立されてから初めて、現理事の全員がアジア学院のキャンパスを実際に体験したことになります。

私たちはお互いに直接会うことができなくても、共に働く機会は多くあります。その一つがAFARIメンバーによる、英語の能力を生かしたアジア学院出版物作成の手伝いです。AFARIの理事であるパム・ハセガワ氏と他数人で、英語の学生名簿や、2015年度学生のプロフィールを執筆しました。そしてAFARIメンバー全員に、ニュースレター”Take My Hand”(編集はアジア学院、印刷はアメリカ)と学生名簿を送付しました。これはまさに、AFARIとアジア学院学生募集担当職員キャシー・フロードとのよい協力体制の成果です。他にも、AFARIメンバーが英語版2014年度事業報告の校正をし、St.オーラフ大学の学生ケイトリン・コネル氏がTake My Hand冬号に記事を執筆しました。

以上の働きから分かるように、AFARIの活動の鍵は献身的な人々です。そして、今AFARIが抱えている大きな課題の一つは、必要な技術や資質、アジア学院への情熱を持ち、理事や委員会のメンバーとして奉仕する新しい人員を増やすことです。

2015年度には、合同メソジスト教会からアジア学院に派遣されているジョナサン・マッカーリーと妻の里美さんと私の3人で、アメリカ国内の各所を講演して周りました。アジア学院の働きを新しい人たちに伝えるだけでなく、アジア学院を愛し支援して下さっている多くの団体や個人の支援者の方々との繋がりを、より強める旅となりました。

2015年度 AFARIのアジア学院への財政支援

合計 14,893,950 円

現金支援の合計 12,010,700 円	助成(指定なし): 5,053,900 円、助成(奨学金): 1,726,750 円、 助成(チャタジー・映像企画): 1,005,200 円、UMC Advanceキャンペーンを通しての助成: 253,850 円、UMC Advanceキャンペーン: 3,967,750 円、その他の間接支援: 3,250 円
非現金支援の合計 2,883,250 円	印刷/郵送/移動/製作費用: 950,950 円、 講演ツアー旅費・経費

会計報告

事務局長 佐久間 郁

皆 さまのご支援をありがとうございます。
2015年度は震災から5年を経、災害復興事業を終える大きな締めくくりの年でした。皆さまのお祈りとご支援により私たちのような小さな学院がここまで復興できたことを心より感謝申し上げます。

貸借対照表

災害復興事業関連会計を締めるに当たり、復興事業特別寄付金の残高 36,685,263 円を復興事業修繕引当金として計上しました。(詳しくは 16 ページ) その引当金は固定負債に計上され、さらに年度末時点での工事未払金計上等約 1,100 万円も負債の部に加算されたので、負債が前年度より約 4,200 万円増加し、2 億 5 千万円ほどになりました。しかし実際には学校債償還や長期借入金返済合わせて約 1,300 万円の負債を減らすことができいております。資産は約 500 万円の減少で、約 11 億 2300 万円でした。

消費収入

消費収入に関しては、海外団体からの奨学金が大幅に増加し、学生生徒納付金全体で 1,500 万円増となりました。一方で災害復興特別寄付金関連の収入は太陽熱利用の設備に対する国庫補助金(約 700 万円)のみとなり、昨年度より 4,000 万円近く減りました。

消費支出に関しては、2015 年度に完成した職員住宅(4 棟)の基本金組入れ 87,875,592 円、更に 3,600 万円を超える減価償却費の組入れがあったために膨らみ、消費支出のバランスは 135,365,134 円の支出超過となっております。

監査報告

学校法人アジア学院寄付行為第 7 条の規定に基づき、2015 年度の事業および会計の状況について監査した結果、適性に執行されたものと認めます。

2015年5月5日
学校法人 アジア学院

監事

大久保 知宏

監事

村田 榮

貸借対照表

2015/4/1 ~ 2016/3/31

資産の部

	本年度末	前年度末
固定資産	1,045,953,670	984,428,566
有形固定資産	929,270,228	868,666,673
(内建物仮勘定)	8,464,370	39,455,400
電話加入権	161,600	161,600
出資金	154,000	154,000
有価証券	0	64,930
預託金	70,800	41,670
退職金引当特定預金	10,882,787	7,880,144
奨学基金特定預金	72,712,488	72,625,321
奨学金特定預金	31,112,693	34,834,228
建物修繕引当特定預金	1,589,074	0
流動資産	77,454,618	143,879,375
現金預金	30,996,955	61,457,920
未収入金	371,058	1,088,248
貯蔵品	0	357,250
販売用品	1,842,958	1,764,379
有価証券	38,790,201	72,453,256
前払金	5,336,878	6,536,385
仮払金	116,568	221,937
資産の部合計	1,123,408,288	1,128,307,941

負債の部

固定負債	144,472,103	111,200,000
長期借入金	67,240,000	68,900,000
学校債	31,500,000	33,300,000
退職給与引当金	9,046,840	9,000,000
復興事業修繕引当金	36,685,263	0
流動負債	105,534,359	96,236,573
短期借入金	63,660,000	63,660,000
学校債	7,010,000	16,610,000
未払金	11,437,153	1,150,741
未払金消費税	341,500	822,600
前受金	20,750,352	9,003,522
預り金	2,355,354	4,989,710
負債の部合計	250,026,462	207,436,573

基本金の部		
基本金の部合計	1,107,466,601	1,019,591,009

消費収支差額の部		
翌年度繰越消費支出超過額	234,084,775	98,719,641
内今年度消費支出超過額	135,365,134	39,037,000

負債の部・基本金の部・及び消費収支差額の部合計	1,123,408,288	1,128,307,941
-------------------------	---------------	---------------

消費収支計算書

2015/4/1 ~ 2016/3/31

消費収入の部

	2015年予算	2015年決算	(単位：円) 2016年予算
学生生徒等納付金 (*1)	53,999,657	48,454,548	47,530,360
授業料	4,388,000	2,970,000	1,008,000
入学金	495,137	182,000	285,000
食事費	882,000	808,000	312,000
施設設備資金	882,000	808,000	312,000
国内団体学費指定寄付金	14,708,000	11,499,890	18,308,000
海外団体学費指定寄付金	29,577,820	31,235,497	25,224,000
渡航費	3,066,700	951,161	2,081,360
手数料	22,000	0	11,000
寄付金	44,850,000	58,545,399	46,744,792
国内国外一般寄付金	41,850,000	50,477,526	42,946,000
現物寄付金	0	0	0
特別寄付金	3,000,000	8,067,873	3,798,792
(内災害復旧特別寄付金)	(0)	(1,042,535)	(0)
補助金 (*2)	8,034,200	9,800,000	2,884,200
資産運用収入	850,000	4,159,382	3,492,000
受取利息・配当金	50,000	80,282	50,000
施設設備利用料	800,000	4,079,100	3,442,000
事業収入 (*3)	26,488,132	26,034,457	24,046,700
雑収入	855,000	2,988,871	3,000,000
資産売却差額	0	0	2,085,379
帰属収入合計	135,098,989	149,982,657	129,794,431
基本金組入合計 (*4)	-100,000,000	-87,875,592	-1,600,000
消費収入の部合計	35,098,989	62,107,065	128,194,431

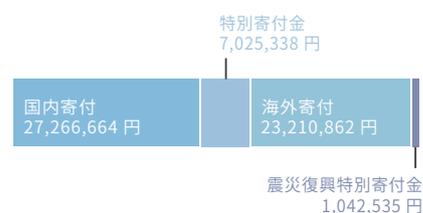
消費支出の部

人件費	71,549,362	68,438,359	70,962,682
教育研究費	28,529,499	25,337,962	27,790,599
管理経費	70,159,408	65,780,350	67,720,852
(災害復旧費)	(14,000,000)	(3,719,599)	(3,500,000)
(減価償却費)	(34,920,000)	(36,203,847)	(39,343,702)
借入金等利息	1,878,000	1,230,265	1,014,000
資産処分差額	0	0	0
予備費	6,000,000	0	0
復興事業修繕引当金繰入額	0	36,472,199	0
消費支出の部合計	178,116,233	197,472,199	167,488,133
当年度消費支出超過額	143,017,280	135,365,134	39,293,702
前年度繰り越し消費支出超過額	98,719,641	98,719,641	234,084,775
翌年度繰り越し消費支出超過額	241,736,921	234,084,775	273,378,477

【注記】 (*1) 学生納付金には次のものが含まれる。
 入学金：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち入学金として指定されたもの
 食事費：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち食事費として指定されたもの
 施設設備資金：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち寮費・施設設備資金として指定されたもの
 (*2) 再生エネルギー熱利用加速化支援対策事業助成金を含む
 (*3) 農産物、加工食品、民芸品等の販売、プログラム等による収入。
 (*4) 職員住宅分を基本金組入した。
 (*5) 2015年度消費支出の内訳については、右頁を参照。

寄附金の種類別割合

合計 58,545,399 円



消費支出の内訳

人件費支出	68,438,359
教員人件費	18,362,306
職員人件費	42,326,853
その他人件費	4,749,200
退職給与引当金繰入額	3,000,000
教育研究費	25,337,962
消耗品費	220,121
光熱水費	1,869,228
旅費交通費	0
奨学費	4,872,080
見学費	2,203,565
実験実習費	5,169,969
学生交通費	109,459
学生渡航費	5,529,448
教材費	145,502
研究費	1,140,530
宿舍費	95,783
学生厚生費	547,789
職員研修費	438,388
事務費	172,800
諸会費	70,450
卒業生同窓会支援費	481,794
プロジェクト費	100,000
特別講師費	856,780
車両費 (バス・農業用車両)	957,026
雑費	0
貯蔵品振替差額	357,250
管理経費	65,780,350
消耗品費	155,265
光熱水費	1,869,229
旅費交通費	974,477
募金費	1,375,680
車両燃料費	1,193,521
福利費	71,076
通信運搬費	775,398
事務費	3,136,281
出版物費	675,800
車両修繕費	1,147,994
管繕費	1,605,128
損害保険料	1,107,642
賃借料	1,201,796
公租公課	785,800
諸会費	157,600
会議費	363,016
報酬委託手数料	2,326,055
補助活動収入原価	4,177,047
行事費	152,734
渉外費	92,320
雑費・災害復旧費	6,232,644
減価償却費	36,203,847
借入金等利息支出	1,230,265
借入金利息支出	734,965
学校債利息支出	495,300
復興事業修繕引当金繰入額	36,685,263
資産処分差額	0
消費支出の部合計	197,472,199

放射能を測定する

アジア学院ベクレルセンター 担当 山下 崇

アジア学院ベクレルセンターは 2013 年度より赤字運営が続いており、主な支出が部屋の使用料であるが、ドイツの EMS (Evangelical Mission in Solidarity) から 100 万円の寄付を受け、赤字の補てんが可能となりました。

185 検体を測定 (食品 149 件、食品以外 37 件) し、食品のうち 3 件 (シイタケ、タケノコ、乾燥させたお茶) がアジア学院の基準値 37 bq/kg を超えました。食品以外では依然として杉の葉の値が高く堆肥に混ぜる事ができません。肥料として有効な木灰も今後まったく使える見通しは立っていません。また 44 検体において 2012 年と 2015 年で比較をおこないました。セシウム 134 の半減期に伴う減少や畑を耕すことにより作物のセシウムの含有量は減っています。アジア学院ホームページにて測定データを公表し現状を伝えています。

高嶋 幸雄 ベクレルセンター測定ボランティア

国や地方政府は放射能に関する食の安全性を声高に訴えていますが、本当に全ての食材を十分に測定できているのか、疑問に感じています。私たちは自分たちで放射能測定を行うことによって、安全なものとは何かを実感を持って知ることができました。少なくとも西那須野の地域においては、地元で栽培された穀物飼料で肥育されている畜産品は安全であることが確認されていますが、きのこ類や木の実類、野生動物の肉などからは依然として安全とは言えない放射能測定値が検出されています。放射能から子どもを守るという見地に立ち今後もアジア学院のボランティアとして、放射能測定とその分析、啓蒙などに携わっていきたいと考えています。

利用者からの声

西那須野幼稚園 福本 光夫 園長

「地域の為、子供たちの為に測定を続けてくれていることに感謝します。私たちは毎日の給食を測定しています。私たちは子供達がどれだけ放射能を取り込んでいるかを知り、子供達に安全なものを提供していく義務があると考えています。アジア学院ベクレルセンターは 10 年といわず測り続けていってほしいと願っています。」

木佐美 泉 さん

「家庭菜園をやっており、作った野菜を子供や孫に安心して食べさせたいという思いから測定をお願いしています。丁寧な測定と説明に感謝しています。」

(会計報告に続く)

収入の種類別割合

合計 149,982,657 円



消費支出の部合計

合計 197,472,199 円



役員

理事長

大津 健一 元アジア農村指導者養成専門学校校長

副理事長

遠藤 抱一 アジア学院 法人財務室長

常任理事

門脇 英晴 (株) 日本総合研究所特別顧問
星野 正興 日本基督教団松崎教会牧師

理事

飯沼 淳子 那須友の会
佐藤 範明 読売新聞那須塩原支局担当
田坂 興亜 元アジア学院理事長・
アジア農村指導者養成専門学校校長
興石 勇 日本聖公会志木聖母教会牧師
山根 正彦 (学) 香川栄養学園理事・総務部長
荒川 朋子 アジア農村指導者養成専門学校校長

監事

大久保 知宏 藤井産業(株) 執行役員 総務部長
村田 榮 那須ワイズメンズクラブ

評議員

荒川 治 副校長、教育部長、農場長
大柳 由紀子 副校長、教務主任
佐久間 郁 事務局長、募金・国内事業
長嶋 清 元アジア学院職員
米田 ミチル 聖母訪問会総長
潘 炯旭 日本基督教団西那須野教会牧師
福田 龍介 東京ユニオン教会長老(2016年1月没)
久世 了 前(学) 明治学院学院長
菊地 功 カトリック新潟司教区司教
山口 和枝 元全国友の会代表
福本 光夫 (学) 西那須野学園 西那須野幼稚園園長
李 秀夫 (株) インテック代表取締役
セラジーン・ロシート NGO/NPO コンサルタント
小海 光 公益財団法人 ウェスレー財団代表理事
永田 佳之 聖心女子大学文学部教育学科教授
粟谷 しのぶ 弁護士、コスモス法律事務所

2015年度 コミュニティ



職員

名誉学院長

高見 敏弘

専任職員

荒川 朋子 校長
大柳 由紀子 副校長、教務主任
荒川 治 副校長、教育部長、農場長
佐久間 郁 事務局長、募金・国内事業
デービッド・マッキントッシュ 国際関係
上村 真由 野菜・作物
櫻井 将伸 野菜・作物
大谷 崇 畜産
ギルバート・ホガング 畜産
ザチボル・ラコー 給食
キャシー・フローディ 学生募集、卒業生アウトリーチ
ジョナサン・マッカーリー 共同体生活
ティモティ・B・アパウ 共同体生活
佐藤 裕美 販売・庶務・広報
山下 崇 外部プログラム・
那須セミナーハウス主事

非常勤職員

君嶋 満恵 会計
荒井 興柱 庶務
田仲 順子 図書
直井 由美子 給食
福島 昌代 食品加工

嘱託職員

遠藤 抱一 法人財務室長
藤嶋 トーマス 逸生 広報

ボランティア

長期ボランティア

ターナー・リッチー 学生選考
ジョイ・アンダサン 農場
ジョナサン・ウィルソン 農場
稲垣 美帆 農場
井口 恵 給食
三須 朋美 農場
平野 伸吾 農場
荻野 早奈美 事務
ウォレン・ウエサト 農場
近藤 亮一 国内事業
レオニー・M・ヴィーガント 農場
コーラ・M・イエス 学生選考
マーヌエル・ライフ 給食・学生選考

通いのボランティア

伏見 卓 宮繕
小野崎 仁 宮繕
平山 隆 宮繕
宮本 希世香 総務
矢嶋 由紀子 総務
伊藤 正 販売
柏谷 重明 販売
西野 順子 販売
畠澤 明枝 販売
堀内 紀江 販売
佐原 市郎 国内事業部
林田 綾子 総務
潘 炯旭 共同体生活

藤本 和子 給食
久保 瞳 給食
ベロ・ルイパ 畜産
木村 裕子 給食、学生選考、
総務
上田 英二 野菜・作物
マッカーリー 里美 共同体生活
清水 益夫 畜産

ABC ボランティア

西川 峰城 藤本 渉平
高嶋 幸雄 早坂 孝行
阿久津 隆



2015年度卒業生

農村開発科

- カメルーン 1) ジュード・アケムボン・ゼナフィン 養蜂と自然保護協会 (ANCO)
 ガーナ 2) ソロモン・コドウア メソジスト教会 ジェドゥアコ共同体
 インド 3) カビタ・ブラドハン・シャカー インド 母と子供のための団体 (IIMC)
 4) アレムラ・サミュエル チュムケディマ自助グループ連合
 インドネシア 5) アグネス・ティオリナ・ルンバントピン バタック プロテスタント教会
 日本 6) 山邊 温子
 7) 谷澤 悠人
 ケニア 8) ジョセフ・ディラング・ギティム 命の泉ケアセンター
 9) デービッド・ギタリ・カロキ ケニア聖公会 開発 サービス
 ラオス 10) コー・タオ ラオス宣教イニシアティブ
 リベリア 11) ドロシー・レワ・イェンニー リベリア合同メソジスト教会
 マレーシア 12) メイ・フォン・ホー マレーシアン ケア
 ミャンマー 13) メアリー CARD 農村開発のための地域社会協会
 14) ソー・チッ・チッ カレンバプテスト連盟
 15) チャン・フツップ CRDP チン被災支援・開発プログラム
 16) エリザベス・マー ホビン農村開発
 17) ギン・スアン・リアン テディムバプテスト連盟
 18) ノー・エー・ワー・ポー フバアンマウラミネ協会
 19) ビム・バハドゥール・ライ 全国開発機構
 ネパール 20) ジョブ・ラグラダ ゴスペルホールに集うクリスチャンの会
 フィリピン 21) ナフォエイ・ミアタ・ピワ Afra-SL 農村発展機関
 シエラレオネ 22) モハメド・ノーシャド・イルファナ・ベガン 開発・平等・平和・禁酒のための女性協会
 スリランカ 23) クレピナ・ティビイタ・クウィギジレカラ 福音ルーテル教会 タンザニア北西教区
 タンザニア 24) ティリフィナ・バネノウァキ・トマス タンザニア聖公会 ルウエル地区
 ウガンダ 25) フレッド・クゴンザ SARS 農村社会のための持続可能な活動
 ベトナム 26) フウン・ンゴック・ドゥック 農村開発センター
 ザンビア 27) リディア・カウンダ・チブエ チベンビ 農業専門学校
 ジンバブエ 28) エマニュエル・チンバ 合同メソジスト ニャディネ ミッション

研究科

- インド 29) トシャン・カリン
 ドーカス・ノーブル基金
 (2007年度卒業生)
 フィリピン 30) ニコラス・タフヤン
 フィリピン多文化開発協会
 (2008年度卒業生)

卒業生インターン

- 日本
チェ・モトキ
 31) 崔元棋
 (2014年度卒業生)